

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2019年6月号」

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。
～テサロニケの信徒への手紙一5章16～18節

6月に入りました。これから梅雨の季節を迎えますが、本校では通学区域が広範囲に及んでいるため天候も通学路の状況もそれぞれに異なります。学校でも安全指導を行います。各ご家庭でも通学時に気をつけることについての確認をお願いします。なお、危険が予想される場合には決して無理に登校させないようにしてください。

ところで、私は「ブラタモリ」と「ポツンと一軒家」という2つのテレビ番組を毎回楽しみしています。もともと地図を見るのが好きで、国土院発行の地形図を広げては地形や地名から実際の様子を想像したりしていました。また、列車や飛行機に乗るときはできるだけ窓際の席をとり窓外や眼下の景色を飽きることなく見えています(家族はあきれていますが)。地形はもちろんです。なによりそこでどんな生活が行われているのか興味がつきません。そういうこともあって以前から紀行番組は好きでした。最近は紀行番組が増えてきて、国境線や小さな村など多様な切り口で紹介されるようになりましたが、特にこの二つは他にない視点で作られていると思います。

「ブラタモリ」は、地形や地質に着目することで、知っている土地がまったく新しい見え方をすることやタモリさんの博識ぶりがおもしろさのポイントでしょう。「ポツンと一軒家」はもともと別の番組の中のひとつのコーナーとして時々放送されていましたが、やがて独立し、去年からレギュラー化それも日曜日の8時というゴールデンタイムでの放送となりました。新聞の週間視聴率のランキングで1位になることもしばしばという人気ぶりですが、その理由は一軒家そのものよりも、そこに住んでおられる方々の「物語」にあるのではないかと思います。

番組では、毎回住んでおられる方の生活ぶりやこれまでの歴史が紹介されるのですが、高齢者が、夫婦であるいは一人で住んでいるということが多くようです。そこで語られるのは、特別なものでも華々しいものでもなく、不便でこれまでも苦難の連続だったようなことが少なくありません。それでも、家族や生まれ育った土地への思いには胸を打つものがあり、今の生活を変えるつもりはないと語る口調からは平安さが伝わってきます。

最近民族学者宮本常一氏著の「忘れられた日本人」を読んだのですが、そこでは江戸末期から昭和の初めまでに生きた山村の人々の環境やライフヒストリーが書かれています。自ら村々を尋ね古老から直接聞いた話からは、教科書で学ぶ歴史からは分からない当時の生活の様子、それに人々の息吹までもが伝わってきて、興味深く読むことができました。描かれている人々の暮らしぶりの多くは今より遥かに過酷で貧しいものでしたが、紹介されているエピソードには、「ポツンと～」からと同じような印象を受けるものもあり、いったい幸せとは何なのだろうと改めて考えさせられます。

もう一つ、この番組と本から改めて強く感じたことがあります。それは名もなき方々であっても、過去に生きた一人ひとり、今生きている一人ひとりの人生が喜びや悲しみの物語で彩られているということ、大げさに言えば一人ひとりに「世界」があった(ある)ということです。そう考えるとき、命の大切さとかけがえのなさが実感を伴って胸に迫ってくる気がします。日常生活

の中で私たちは人間を含めて様々なことがらを記号や数字で表現したり伝えたりしています。東日本大震災で2万人以上の方が犠牲となりましたが、「2万人」という数字だけでは、どれだけ実感できるのか…。しかし、その一人ひとりに多くの物語があったということを考え想像することができれば、被害の大きさや残された方々の悲しみや苦しみを、ずっと深く感じ取ることができるのではないのでしょうか。もちろん全てのことをそのように想像力を働かせ深く受け止めることなど不可能です。ただ、大切なことについては、立ち止まり考え想像し深く理解しようとする姿勢を持ちたいものです。子どもたちにはそのような姿勢とともに、何が大切なものなのか見抜く力も身につけてほしい、そのためには、論理的に考える力と同時に感性を育むことも大切ではないか、そんなことを思っています。

(文責 宮崎 隆一)